協同の歴史の瞬間　第106回

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その10）

1934（昭和9）年12月号
立体農業への模索が始まる。父の死と村の悪習、そして禁酒会の提案

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

ニワトリの飼育方法、とりわけ渋抜きの方法を知るために東助は、「新見栄一（にいみえいいち）」に手紙を書く。その返事を見て、柿ノ木の省七はこの方法でやれば「貧乏の山村でも生活に困らない」と立体農業に興味を示す。新見栄一は、賀川が自分を託した人物で立体農業の必要性を強調したのである。

そういう話をしているところに、東助の父春吉がなだれに巻き込まれた、との情報が入る。青年団の助けを借りて父を捜すが、死体で見つかる。お通夜、葬式に臨む東助を酒に関する村の悪習が苦しめる。それを改善するため「禁酒会を村で起こそう」という約束が成立する。

立体農業への模索が始まる
～教え導く者としての「新見栄一」が話題となる～

山形県から送ってくれるはずのコイが品切れになったので、東助は、朝からわら細工に専念していた。そこに島貫伊三郎が入ってきて、むしろ機のわきで大声で言った。

「東助さん、おらあ、この間来とった東京の先生に聞いたがなあ。東京では、クヌギの実でニワトリを飼っている人があるっていうが、ほんとだろうかな」

東助は縦筋になっている縄の間にわらを引き込む細いタケ竿を少し休めて、島貫に言った。

「うむ、そりゃ、おれも聞いたよ。ぜひやってみたいなあ。やっている人もおらあ、知ってるよ。新見栄一さんがやっているっていうんだろう。なんでもクヌギを六割まで混ぜているといっていたなあ」

「驚いたなあ、クヌギを六割まで混ぜてニワトリが生きとるもんかね？」

早く実験しようと話がまとまり、東助は、東京本所産業青年会新見栄一宛に「クヌギやナラの実で、ニワトリを飼育する方法を教えてくれ」と手紙を書いた。

「新見栄一」は賀川の代表作でその前半生の自伝的小説といわれる『死線を越えて』の主人公の名であり、賀川が小説中に自分自身を仮託した人物に対して用いる名前である（本連載　令和６年２月配信　参照）。ここでも賀川が強く主張した立体農業を教え導く先導役としての役割が与えられている。

その手紙の返事が、一週間めに着いた。それによって、渋抜きの方法がわかった。で、彼は、さっそく、島貫が持っていたカキとトチの実をひき臼でひき割って、ニワトリにやりはじめた。

その話は、耳よりなことだといって、柿ノ木の省七も、木内のじいさんもすぐやってきた。 そして、飢饉のために集めておいたトチとクヌギの実が、さっそくニワトリの餌に変わることになった。

こうして４人は今後の農業の方法や地域資源の活用等について雑談をするうちに、柿ノ木の省七が次のような意見を言った。

「なるほど、気がつかなかったよ。これが早く気がついておれば、この山奥でも、コイは食えるし、ニワトリの卵はすすれるし、ウサギの肉もブタの肉も、みんな町へ、どんどん売り出すことができたものを、なんという、わし等はあほうだったんだろうなあ……飼料がただになれば、この貧乏した山村でも結構、生活には困らないねえ」

これはまさに、米と麦に頼りすぎているわが国の農業を、地域の自然の恵みを活かし、ヤギやコイやミツバチの飼育、山林原野の木の実の活用、五穀栽培、そしてこれらの加工販売などに転換していこうとする賀川が提唱した立体農業に他ならない。

父の死と村の悪習、そして禁酒会の提案

そんな話をしているところへ、大塩の温泉宿の息子矢崎藤吉が、かけ足で、東助の家に飛び込んできた。（略）

「おい、たいへんじゃ、たいへんじゃ！　春吉さんがよう、中ノ沢から蘭峠へかかるところで、なだれにやられて出てこないってよう！」

それを聞いた東助の顔色が、たちまち蒼白に変わった。そして言葉さえ出なくなってしまった。彼は一種の恐怖にふるえた。彼は“あんか”にはいっていた母に、その話を聞かせると悪いと思ったので、すぐ、表に飛び出した。

あわてる東助を藤吉が止め「なだれの雪を取り除けなければ救い出すことができないから青年団員の力を借りて親父を掘り出そう」と提案し、青年団員も召集された。東助は遭難現場へ急ぎ、やみくもに雪を掘りだした。そして偶然に父春吉の印ばんてんの端をみつけ、「見えた！」と叫んだ。

その声に、青年団員が駆けつけてきた。それで、シャベルをそろえて、ていねいに掘り起こしたが、もうかれこれ、遭難したときから三時間以上もたっていたので、春吉はすでに、こと切れになっていた。東助は、父の死がいに取りすがって泣きつつ、耳許で呼んだ。

「おとうさん！　東助です！　東助です！」

と呼んだが、水っ鼻のようなものが、鼻の中から出てきただけで、答は無かった。

青年団員が、交替に春吉の死体を、四人で蘭峠の絶頂まで引き揚げた。そして、そこから、むしろ一枚を借りて担架を作り、それを、また一里下の大塩村まで運んだ。

父のお通夜、葬式の様相は「小さな恐慌」というタイトルがつけられている。

お念仏が始まった。お通夜の酒を津田良子が買いに走った。村の年寄株は、お通夜をするというのは口実で、みな台所にはいって酒を飲みだした。（略）

二升ほど買ってきた酒は、すぐ無くなってしまった。それを見た温泉宿の矢崎藤吉は東助に注意した。

「酒が無いと、あとでうるさいから、五升樽一本、うちからとってこようかね」

東助は、それに反対だとは言えなかった。彼は、村にこんな悪い風習があることをまったく忘れていた。

（なるほど、これだから村は疲弊するのはあたりまえだ。一方には食えない食えないと政府に請願しても、他方には、こんな反面があるのだから、村の疲弊するのはあたりまえだ。どうしてもこうした因習を打破しなければ、窮乏した山村を救うことはできない……）

と、彼はしみじみと感じた。

お通夜、葬式の様相は「小さな恐慌」というタイトルがつけられている、と述べたが金銭面で東助は苦境に立たされる。

ちょっとした葬式は三十五円以下ではできなかった。それになお困ったことは、死亡診断書を書いてもらう医者を、四里近く離れた

喜多方町から迎えなければならなかった。これに、どうしても十五、六円はかかった。そのうえ、葬式がすんでから、また村の人々に酒を飲ますのが風習であった。そんなことで、ようやく苦心してコイでもうけた百円の金が、たった二十四時間のうちに――しかも父の葬式を出す前に消えてしまった。

お通夜の翌日の午後四時、家にはふさわしくない大きな葬式が出た。

翌日から、もう東助は、コイを買い入れる資金もなく、新しい事業を始めるにも、一文も金がなかった。

という状況にまで追い込まれたのである。

こうした状況の中で、次のような新しい動きが出た。

葬式がすんだ晩のことであった。彼は窮状をはじめて佐藤巡査に訴えた。すると佐藤巡査も、

「ぜひ禁酒会を村で起こそうじゃないか」

と言いだした。

その話を島貫にすると、彼も大賛成であった。木内のじいさんもすぐ賛成してくれた。処女会の高井米子も、田中高子も、津田良子も、大井久子もみな村の禁酒運動には、大賛成であった。それとともに、このさい、だんぜん虚礼を廃止して、葬式も結婚式も、できるだけ費用を節約しようじゃないかと約束が成り立った。

のである。

この禁酒会は、ある事件を契機として大塩村禁酒同盟会として成立する。次回それを確認したい。

＜参考文献＞
『家の光』（昭和９年12月号）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（２００９年）を参考にした。